

戦争から学んだこと

弘前市立第三大成小学校

藤田 亜望

ぼくは、『ななしのこんべさん』という本を読みました。それは今から七十五年前、七月九日、大阪さかいの大空しゅうの話です。

主人公のもし子には、足にしょうがいがあります。それは、「のうせいまひ」という、生まれつき頭の中で思っていることが、手や足にうまく伝わらない病気です。それでも、もし子は、みんなと学校で勉強や友だちを作りたいと思っています。

しかし、戦争のあった時代は、「歩けない子は学校へ行っではないけない。」という考えがありました。もし子は、どんなに悲しくて、みじめに思ってたでしょう。

もし子には、戦争に行ったお父さん、おなかに赤ちゃんのいるお母さんがいます。

そこへある日、親せきのまもととまさるの双子の兄弟が引っこして来ました。まもととまさるは、いたずらっ子ですが、学校に行けないもし子とは、仲良しでした。まもととまさる

は、もし子に手作りの人形をあげました。もし子はその人形に「ななしのこんべさん」と名づけ、戦争で亡くなったお父さんをおもって大切にしていました。

ある日の真夜中、しょういだんがもし子たちをおそいました。おなかの大きいお母さんは、もし子をうば車に乗せて、必死ににげました。しかし、周りは火の海でお母さんは亡くなってしまうました。

もし子はお母さんとはぐれてしまいました。まもととまさるに命を救ってもらいました。大事にしていたななしのこんべさんもいっしょです。

この大空しゅうで大阪のさかいの町では、亡くなった人は千三百九十四人、けが人は、千五百七十四人でした。だれにも探してもらえず、身元の分からない「ななしのこんべさん」もたくさんいたそうです。

ぼくは、戦争を知りません。ぼくのおばあちゃんもおかあさんも戦争を知りません。しかし、ぼくはこの本を読んで、

二つの大切なことを学びました。

一つは、しょうがいがあっても平等にしていく世の中です。人とちがうこと、できないことはいけないことではありません。しょうがいがあっても家族からあいされて、人は一生けん命生きています。戦争の時代も今の時代も、決してさ別はあつてはいけません。

二つ目は、命の大切さです。戦争は、「人が人を殺す」おそろしいことです。つみのないたぐさんの命がうばわれることは、とても悲しいことです。だから戦争は、決してあつてはいけません。

ぼくはこの本を読んで知った「戦争のおそろしさ」、「命の大切さ」を大人になつてもわすれません。